

日独対訳辞書解題 (二)

信 岡 資 生

3 袖珍^ㇿ字語譯囊 (A-3) 山本松次郎編 長崎出藍社 明治五年九月

石本岩根氏は『明治年間に於ける獨和及び和獨辭書に就て』で「未見のもの」と記されているが、この辞書は、先に『日独対訳辞書解題 (一)』で述べたように、東京外國語學校編『維新前後外國語圖書目録』(昭和五年十一月)の二九頁に記載されている他、最近では天理大学附属天理図書館編集の『天理ギャラリー第106回展 日本の古辞書』(平成9年5月)に

57. 袖珍^ㇿ字語譯囊

最初の独和辞書。「^ㇿ字」は字漏生(プロイセン)をさし、ドイツを意味する。編者は題辞には火州後学と署名、長崎の洋学者山本松次郎だといわれている。明治5年(1872)長崎で、本木昌造の新塾活版所の新活字を用いて印刷出版された約500頁の本格的洋装本1冊。プロイセンのロトツクの字^ㇿ対訳辞典を主に、他の辞典も参照し正確を期したと記すが、ウムラウトの符号等はなく、誤りも目につく。明治5・6年には計5種の独和辞典の出版をみるが、本書は唯一の長崎版である。

と、扉の写真と共に記載されている(27頁)。その写真によれば(図1, 2)扉左には

明治五年新鑄
袖珍^ㇿ字語譯囊
瓊浦 出藍^ㇿ蔵本
新塾活版

日独対訳辞書解題 (二)

とある。新鐫とは新刻、新版というほどの意味である。そして扉右には

DEUTSCH-JAPANISCHES
TASCHENWORTERBUCH.
ZUM GEBRAUCH
für
SCHULER, KUNSTLER, REISENDE
UND AUSWANDERER.

ERSTE DRUCK.
NAGASAKI
FUNFTE JAHR MEIDI.

と印刷されている。

田中梅吉著『総合詳説日獨文化大交流史』(三修社 昭和 59 年) が 518 頁に掲げている写真版によると、題辞は次の通りである。

題辭

方今洋學日新ノ氣運ニシテ而シテ孛語未タ世ニ洽カラサルモノハ蓋
シ辭典ノ邦言ニ解スル者乏シキヲ以テナラン因テ自ラ量ラス粗此ノ
編ヲ述ヘ題シテ袖珍孛語譯囊ト曰フ所謂ル滄海ノ一滴僅ニ童生ノ探
閱ニ便セント欲スルノミ若シ夫レ珠淵ヲ總括スルニ至リテハ則チ應
ニ大方ノ撰アルヘシ而シテ淺學ノ敢テ任スヘキ所ニ非ス況ヤ吾徒頗
ル多事ニ苦シミ而シテ蹟ヲ探リ隱ヲ索ムル事能ワス是ヲ以テ最モ誤
謬遺漏多シ然レドモ看官若シ執筆ノ微勞ヲ察シ幸ニ改正増補ヲ加エ
而シテ覆甕ノ具ト為ル事莫ラシメハ則チ豈啻吾徒ノ慶而已ナラン乎

壬申秋九月

火州後學

また、続く「略語ノ解」のページは

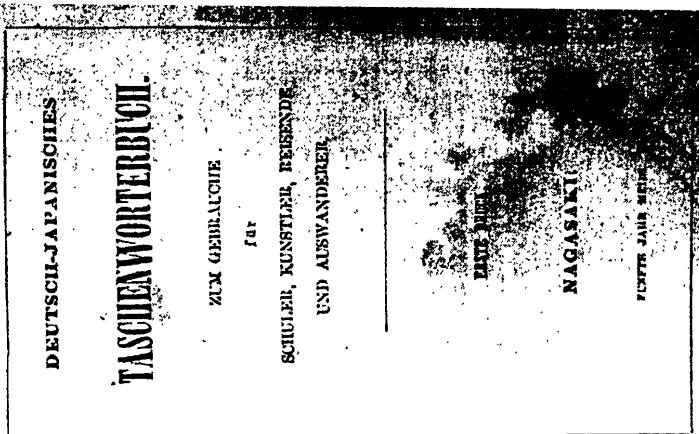


図 2

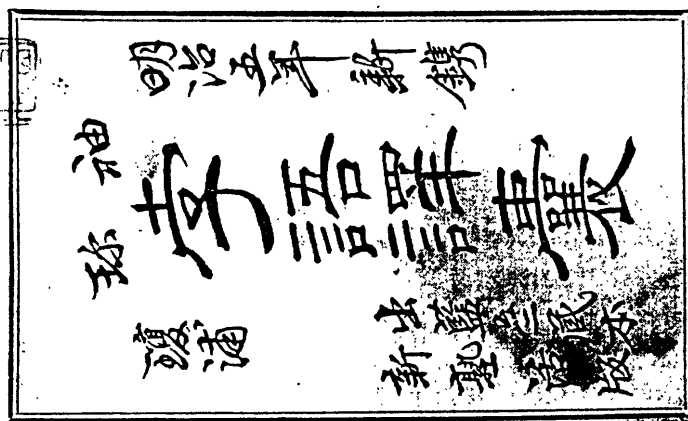


図 1

ERKLÄRUNG DER ABKÜRZUNGEN

解 ノ 語 略

a.	Eigenschaftswort.	形容辭
adv.	Umstandswort.	副辭
art.	Geschlechtswort, Artikel.	冠辭
c.	Vindewort.	接續辭
f.	weiblichen Geschlechts.	女性
i.	Empfindungslaut.	間投辭
ir.	unregelmäßiges Zeitwort.	不規則働辭
m.	männlichen Geschlechts.	男性
n.	sächlichen Geschlechts.	中性
o.	Mittelwort, Participium.	分辭
pl.	Mehrzahl.	複數

さらに、本文の 61 頁は

BEH	61
Begleiten, v. a.	導ク, 誘ク, 送ル, 置ク, 會ス, 交ル
Beglückt, a.	幸ナル
Begnadigen, v. a.	情ヲ懸ル, 恵ム
Begnügen, v. r.	事足ラスル
Begraben, v. a. ir.	葬ル, 埋ル
Begräbnisz, n.	葬禮, 墓所
Begreifen, v. a. ir.	吞込ム, 容ル, 理會スル
Begriff, m.	智恵, 悟リ, 理會

日独対訳辞書解題 (二)

Begrüßzen, v. a.	祝ス, 禮スル
Begünstigen, v. a.	恵ム, 憐ム
Begütert, a.	歡樂ナル, 相應ニ暮シタル
Behagen, v. n.	氣ニ叶フ, 氣ニ入ル
Behaglich, a.	氣ニ叶フタル
Behalten, v. a. ir.	逃ス, 免ス, 保ツ, 探ル
Behälter, m.	守護所, イケス
Behandeln, v. a	衆手ニカクル, 扱フ, 取サバク, 書述ル

この頁だけで判断するのは早計かもしれないが、1 頁あたり約 15~16 語とすると、500 頁とみても収録語数は約 7,500~8,000 語ということになる。

田中梅吉氏は同所で

この本のドイツ語標題ページには、多くのウムラウトの見落としや綴りの語尾の誤りがある … 火州後學は編著者の雅号で、本名は山本松次郎（弘化 2 年—明治 35 年）という蘭・仏学者である。かれはもと漢学畑の人であるが、早く長崎に出て、ボールドウィンからは蘭学と医学、フルベッキ（別説；濟美館教師ジュリー）からはフランス語を学び、明治 2 年には、かの西園寺公望公も一度は在学していた長崎廣運館で、フランス語訓導として働いていたこともあり、後年西園寺の秘書となった。…その学歴からみても、山本がドイツ語に通じてはいなかったようであるが、蘭・仏語の力のあったかれは、そのいずれかとドイツ語との対訳辞書を使って、本書を編んだものであろう。特に学問的貢献をしようとする意図からの仕事でなかったのか、あるいは謙遜からか、かれは題辞で本書を「僅ニ童生ノ探閱ニ便セント欲スルノミ」とことわり、タイトルのドイツ語では「学生、芸術家、旅行者および外遊者の用として」としている。

ともかく簡単ながら一通り辞書の体裁を備えたものが、かくも早いところに長崎の一角から現われた。…長崎県立図書館蔵本によれば洋綴約 17cm×12cm ほどの小形本で、洋活字印刷、1 ページに横組み 19 段、タイトルページと題辞共 6 ページ、本文部 499 ページのもので、語学上の指示としては、各語に品詞別、名詞の性、自・他・再帰・非人称動詞の別等が付記されているだけである。綴字に誤りが多いことは上に指摘しておいた。誤訳ももちろんよく目につくにしても、当時の類書に比べて、はなはだしく多いとはいえない。

鈴木重貞著『ドイツ語の伝来 ―日本独逸学史研究―』(株教育出版センター 昭和五十年)』はこの辞書の大きさを 19,5 cm×12,5 cm (上記田中梅吉氏の調べに比べると、特に縦の長さが 2,5 cm 長い) とし、以下のよう

に記載している。

此書は緑色の布製で背文字はないが、見返しが淡いコバルト色で一見瀟洒たる辞書である。…

日本文の序文二頁があり、略語の解二頁、辞書部四九九頁、最終頁に附言として、「原書李国、ローツク氏の李仏対訳辞典ニ因ト雖モ其ノ和解ヲ施スヤ傍、チエム李英対訳、ボムホフ李蘭対訳辞典ヲ用イ勉テ確實ヲ主トス」とある。ボムホフ李蘭対訳辞典とあるは、杉田玄端手沢本の中にある「ぼむほふ及ぞーん独蘭辞典、一八四六年らいでん版一冊」のことであろうか。此李語訳囊はローマ字を用い(筆者注 本文見出し語も含めドイツ文字 **Fraktur** 活字でなく、ラテン字体の意)、一頁平均一四語と見て約七、〇〇〇語であろう。印刷の不鮮明な箇所もあり、変母音の有無に誤りのあるのが目につく。序文の終には「壬申秋九月、火州後学」とある。発行年月は従って明治五年九月と見て差支えあるまい。編者は火州後学とのみ記して姓名が明記していないけれども、『明治維新以後の長崎』(大正十四年)

には、山本松次郎を此書の編者としている。山本は弘化二年幕末の砲術家山本晴海^{はるみ}の五子として長崎に生れ、幼にして父に就て經書諸子百家の書を学び、万延元年にはボードインについて蘭学医学を修め、慶応元年には済美館教師プチジャン、フィグーや長崎県雇教師フルベッキ、ジュリーらについて仏語を学んだ。慶応三年には済美館教授に任ぜられ、明治二年には広運館仏語訓導となり、同四年まで勤めた。のち長崎県師範学校助教諭になったが、明治十九年には私塾樂山堂を開いて子弟を教育した。明治三十五年歿した。五十八才。

仏語に関する書物その他著書は多いが、独語に関するものは他にない。普仏戦争によるプロシアの勝利は漸く我国にも伝わり、此仏語学者をして独和辞書の編纂を思立たせたのであろうか。従って独仏、独英、独蘭の諸辞典を参照したのであろう。印刷は邦人活版業の創始者本木昌造が明治三年に設けた新町活版所であろう。…

印刷所については、惣郷正明著『洋学辞書事始 こつう豆本・72』（昭和六十一年十月二十日 日本古書通信社）には、次のように記されている。

山本松次郎『袖珍李語訳囊』（四六判・五〇六ページ）は、長崎・新塾活版の印刷である。和蘭通詞・本木昌造が、美華書院の技師長ガンブルを明治二年帰米の途につかまえ、活字の電胎法を学んで、この新塾活版所を開業した。（85 頁）

ここに名前の挙げられている美華書院というのは、中国の上海にあった出版社で、中国在住の英米人宣教師の著書、中国訳の聖書、賛美歌を印刷していた。ヘボンの『和英語林集成』（慶応3年）、堀孝之の『大正増補和譯英辭林』（明治4年）、岡田好樹の『佛和辭典』（明治4年）も、また、後述する松田為常・瀬之口隆敬・村松経春共著の『獨和字典』（明治5年）も美華書院で印刷された。

古賀十二郎著『長崎洋学史 下巻』(長崎学会編集 長崎文献社発行 第三版 昭和五十八年)によれば、アメリカはニューヨークのプレスビテリアン教会(Presbyterian Church)が、福音を宣伝するための宗教書を印刷する目的から、中国の広東に印刷機械一式を送って印刷所を設けたのが美華書院の始まりである。書院は広東から寧波、さらに上海へ移されたが、書院の長となったウイリアム・ガンプル(William Gamble)は、西洋活字と共に配列して調和する漢字活字の製造に心を砕き、苦心の結果独自の漢字活字を編み出した。それがのち日本に伝わって五号活字の原型となったという。長崎製鉄所の頭取であった本木昌造は、薩摩藩の重野安繹が美華書院から取り寄せた活字と印刷機を譲り受け、当時長崎に居住していたフルベッキ(Guido Fridolin Verbeck)と計って、ガンプルを製鉄所雇いとして長崎に迎え、本興善町に製鉄所附属の活版伝習所を設けて活字製造と電気版彫刻の伝習を始めた。「Dr. Guido Fridolin Verbeck が、本木氏のために斡旋して、ガンプル氏を長崎に迎ふる事を得しめ、本木氏をして其の印刷術を大成せしむるに至りし事は、日本印刷の沿革に於いて、永久に伝ふ可き事である」(二〇〇～二〇二頁)。そして本木昌造は、明治三庚午年、製鉄所を辞して新町に活版所を創設し、活字製造と印刷業を営むに至ったのである。

惣郷正明氏は、また、三省堂の隔月刊誌『ぶっくれっと』に1985年1月号から連載を始めた「辞書をめぐる人びと」の(10)「明治維新後に高まったドイツ語学習 司馬凌海とレーマン」の中では次のようにも記している。

また長崎でも、洋学校・広運館のフランス語教師・山本松次郎が『袖珍字語訳囊 Deutsch-Japanisches Taschenwörterbuch』(B6判・五〇五ページ)を著した。日本活字を創成した本木昌造の経営する新塾活版所で印刷し、見出し語は九〇〇〇語ほどで、独仏辞書を元にして成ったと思われる。

日独対訳辞書解題 (二)

4 和譯獨逸辭典 (A-3) 司馬凌海・河村之昌・澤田勝伯・明石文・明石朝幹 編 明治五年十月 東京 春風社合著

本書は『日独対訳辞書解題 (一)』でも述べたように、昭和 56 年 10 月三修社によって完全復刻がなされ、その付録に鈴木重貞氏による詳細な解説書がある。その他本書については、同氏著『ドイツ語の伝来』の 92～97 頁、田中梅吉著『総合詳説日獨文化大交流史』の 526～528 頁、宮永 孝著『日独文化交流史 ドイツ語事始め』(三修社 1993 年)の 217～225 頁に、それぞれ詳しく記されている。

三修社の復刻版に基づき、上記の各解説を参照しながら述べると、この辞書の大きさは縦 17,6 cm, 横 13,0 cm, 厚さ 6 cm で、ドイツ文字で

Handwörterbuch der Deutschen Sprache für Japaner の背文字が入っている。形・大きさの点では『字和袖珍字書』に似ている。洋装で表紙は赤褐色。扉は左頁に三つの欄に草書体で次のように書かれている。(図 3, 4)

明治五壬申歲 孟冬新鐫
和譯獨逸辭典
春風社合著

また右頁にはラテン字体で Handwörterbuch/ der/ Deutschen Sprache/ für/ Japaner/nebst gebräuchlichsten Fremdwörter, mit/ einem Verzeichnisse der unregelmässigen/ Zeitwörter | zum Gebrauch fuer alle/ Staende. | Erste Stereotyp-Ausgabe | Tokei/ Verlag von Kwankorio/ Funftes Jahr Meidchi. と記されている。6 行目の nebst 以下はすべて大文字で記されている。これによるとステロ版(鉛版)印刷であるとしている。先に『字和袖珍字書』の項でも触れたように、東京は「トウケイ」と読まれている。因みに飛田良文著『明治生まれの日本語』(淡交社 2002 年 5 月)によると、慶応四年七月の改称の詔書の「因テ自今江戸ヲ稱シテ東京トセン」には振り仮名がついていなかったのが、明治初年には漢学者は「トウケイ」

と漢音読みし、国学者や僧侶は「トウキョウ」と呉音読みした。「トウケイ」読みの例として、仮名垣露魯文の『萬國航海 西洋道中膝栗毛』(明治三年)や三遊亭円朝『怪談 牡丹燈籠』(明治十七年)や二葉亭四迷『浮雲』(明治二十年)などが挙げられている(25頁)。

発行所と見られる Verlag von Kwankorio は、前記『袖珍字語譯囊』で挙げた『長崎洋学史 下巻』の記述する長崎の活版伝習所で活版の技術を習得した者が、のち東京に移って設立した勸工寮活版所のことである。これについては『長崎洋学史 下巻』の引用する『故本木先生小伝』(明治廿七年九月初版)の以下の記述がある。

此時伝習所ニ在リシ者、後一部ハ、先生ニ属シテ長崎新町活版製造所、東京築地活版製造所、大阪久太郎町活版製造所ノ本源トナリ、一部ハ、製鉄所ト共ニ工部省ニ属シ、明治五年東京ニ移シ、勸工寮活版所トナリ、後左院中ニアリシ活版課ト合シテ印刷局トナリタリ。

さて『和譯獨逸辭典』の表紙に続いて3頁に及ぶドイツ文(ラテン字体)の序文がある。

VORWORT

Während englische und französische Wörterbüche bereits seit Jahren mit Nutzen gebraucht worden sind, hat es an einem deutsch-japanischen Wörterbuche bisher ganzlich gefehlt. An Wortreichthum, Bildsamkeit und geschmeidigkeit übertrifft die deutsche Sprache die meisten anderen lebenden Sprachen und die deutsche Wissenschaft steht in fast allen ihren einzelnen Theilen hochgeachtet von den Gelehrten aller Länder da.

Diese Vorzüge sind an sich schon geeignet und ausreichend, das Stüdium der deutsche Sprache als nutzbringend und interessant erscheinen zu lassen.

Der grosse politische Einfluss aber, den Deutschland in der letzten Zeit

Handwörterbuch
der
Deutschen Sprache
für
Japaner
 KURZ GEBRAUCHLICHEN FREMDWÖRTERN, MIT
 EINEN VERZEICHNISS DER UNREGELMÄSSIGEN
 ZEITWÖRTER.
 —————
 VON **GERHART FRIEDRICH
 STAMME**.
 —————
ERSTE STEREOTYP-AUSGABE
 TOKYO
 VERLAG VON KWANKORIO
 FÜNFTES JAHR MEIDZHI.

図 4

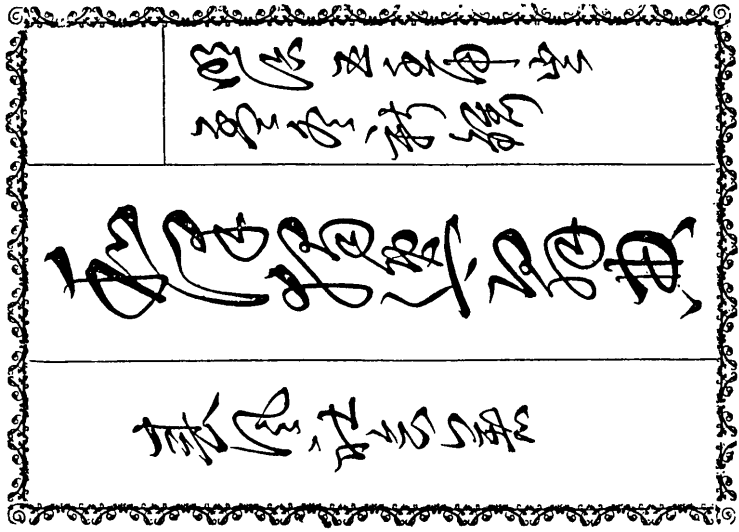


図 3

gewonnen, hat nicht nur in den verschiedenen Ländern Europas der deutschen Sprache weit verbreiteten Eingang verschafft, sondern auch in Japan bereits eine merkliche Wirkung geübt, sodass jetzt in mehreren Fächern deutsche Männer der Wissenschaft mit gutem Erfolge bemüht sind, ihren heimischen Wissenschaften einen neuen fruchtbaren Boden zu gewinnen, ebenso Wie zahlreiche junge Japaner deutsche Boden demselben Ziele entgegen streben.

Bei dem in Folge hiervon in immer weitere Kreisen auftretenden Streben, die deutsche Sprache zu erlernen, ist der Mangel eines deutsch-japanischen Wörterbuches ein sehr fühlbares und der Besitz eins solchen für unserem Vaterland ein unabweisliches Bedürfniss geworden.

Im Voraussicht dieser Verhältnisse hat der Unterzeichnete schon vor langer Zeit den Entschluss gefasst, ein deutsch-japanisches Wörterbuch zu bearbeiten und hat behufs der Ausführung desselben umfassende Vorarbeiten gemacht. Eigene erschöpfende Berufsgeschäfte hinderten ihn jedoch diese Arbeiten selbständig fortzusetzen, weshalb er den Herren A. *Akaschi*, T. *Akaschi* und U. *Kawamura* die vorläufige Bearbeitung des Wörterbuches übertrug und selbst nur die Thätigkeit dieser Herren leitete und ihre Arbeiten, so weit es erforderlich schien, vervollständigte und verbesserte.

Als Grundlage für das vorliegende Werk ist das als gut bewährte pocket-Dictionary von William benutzt worden, doch ist dasselbe durch zahlreiche Zusätze nach den neuesten und besten quellen vielfach vervollständigt und mehrfach abgeändert worden, wo es verbesserungs bedürftig erschien.

In Folge dieser vielen Bereicherungen musste das Format des William'schen Werks vergrößert und der dadurch unpassend gewordene Titel

genannten Wörterbuches in den „Handwoerterbuch der deutschen Sprache für Japaner“ umgewandelt werden.

Unter dieser Flagge lassen Wir somit unser Schifflein von Stapel, und hegen das Vertrauen, dass es nicht nur seine erste Probefahrt glücklich bestehen, sondern sich auch weiterhin als ein verlässliches und brauchbares Fahrzeug bewähren wird.

Tokei, im Herbst

funftes Jahr Meidchi.

(1872.)

DR. SCHIBA.

誤りと見られる個所にアンダーラインを引いてみた。この他にも Deut-schla-nd, geü-bt, Unterz-eichnete, best-ehen などの分綴の誤りも見うけられる。序文の大意は次の通りである。

英語及びフランス語の辞書が既に数年来使用され実益を挙げているのに比べ、独和辞書はこれまでに全く存在しなかった。語の豊かさ、可塑性及び柔軟性の点で、独逸語は他の大多数の現在通用している言語に優り、独逸の学問は殆どすべての箇別分野であらゆる国々の学者たちから高く重んじられている。

こうした特性はそれだけでもう、独逸語の学習を有益かつ興味あらしめるに適し且つ十分である。

しかし独逸が最近勝ち得た大いなる政治勢力は、ヨーロッパの国々でのみ独逸語に広い門戸を開いたばかりでなく、日本でも既に著しい影響を与えた結果、現在幾多の部門で、独逸の学者は彼等の祖国の学術に、新しき実り多き土地を獲得すべく努力して成果を挙げているが、同様にまた多数の若い日本人も同じ目的に向かって独逸の土地を得ようと努力している。

この結果益々広い分野で独逸語を習得する努力が現れているとき、独和辞典の欠如が痛感され、独和辞典の所有はわが祖国にとって必須の必需品となった。

かかる事情を予知して署名者は、既に前々から独和辞書編纂の決意を抱き、これが実現の為に万全の準備をなしてきた。しかしながら自身の抱える激務に、此仕事を独りで続行することを妨げられ、そのため A. アカシ、T. アカシ及び U. カワムラの三君に取り敢えず此辞書の編纂を委託し、自らはただこれら諸氏の仕事を指揮し、必要と思える限り彼らの仕事を補い訂正した。

本書の底本としては定評のあるウィリアムのポケット辞書が用いられたが、これにも最新最良の資料による数多の補遺を行って完全を期し、また修正の必要のあるところは多大の変更を行った。

これら多くの増補の結果、ウィリアム辞書の型は大きくならざるを得ず、それによって不適当となった上記辞典の題名も「日本人のための中型独逸辞典」と変更せざるを得なくなった。

この旗を掲げて我々は此の小船を進水せしめる。そして初めての試験航海を首尾好く乗り切るのみならず、その先も頼もしい有用な船舶としての実を挙げることを信ずるものである。

東京 明治五年（一八七二）秋

ドクトル・シバ

シバは下谷練堀町の私塾春風社の創始者司馬凌海、ドクトルと称したのは明治3年彼が大学東校の少博士となったからである。

この序文に対し、辞書の巻末に明石朝幹の次の跋文がある。(図5)

洋州諸學ノ 皇國ニ行ハル、既ニ數十年就中獨逸彼ノ佛國ノ戰爭ニ大捷ヲ得シヨリ日ニ盛ンニ且其學術殷浩ニシテ各國ノ所能ヲ綜該ス故ニ我師大教授司馬先生夙ニ此學ニ達シー世ヲ風靡ス海内ノ生徒

其學ニ嚮フ者既ニ其半ニ過ク然ルニ英佛蘭等ハ其早ク世ニ行ハル、
ヲ以テ先哲所著ノ辭書陸續梓ニ上リ國內ニ布行ス獨リ獨逸學創開ノ
晩キヲ以テ未タ方寸ノ小冊子ヲモ見ス其學ヲ為ス者皆其措梯ヲ得サ
ルニ苦ム實ニ遺憾ト謂フ可シ我輩久シク之ヲ憂ヒ屢辭書ノ著ヲ先生
ニ請フト雖トモ先生官務紛擾ニシテ筆ヲ採ルニ暇アラズ於是同門河
村之昌澤田勝伯明石文及ヒ予ヲシテ代テ此業ニ從事セシム予輩不學
非才固ヨリ此大業ニ任ヘズ屢之ヲ辭スト雖トモ師命峻拒スルニ由ナ
ク遂ニ各々其固陋ヲ顧ミズ獨國ウイルリウム氏ノ辭典ニ就テ之ヲ翻
譯シ又我師ノ訂正ヲ請ヒ頃日初テ業ヲ卒フ名ケテ和譯獨逸辭典ト云
是聊カ幼童讀書ノ便ニ供スルニ出ルト雖トモ同好ノ士亦此ニ由テ以
テ進マバ則チ其措梯ヲ得ルニ庶幾ン乎

明治五壬申歲孟冬

加賀 明石朝幹識

要旨は司馬の序文と殆ど変わりはない。ただ司馬の序文には編纂に当つた者の名前に澤田勝伯の名が無かった。また河村之昌の名が U. カワムラとされていることにも疑問が残る。熊本大学の上村直己教授は、「Diskussion um die deutsch-japanischen Wörterbücher am Ende der Meiji-Zeit」(『ドイツ文学 第 100 号』日本独文学会 1998)の中で、明治初期から昭和にかけての各独和辞典の序文に共通な要旨は、

1. Die Wichtigkeit des Deutschen als wissenschaftliche Sprache und die Notwendigkeit es zu erlernen. (筆者訳：学術語としてのドイツ語の重要性とドイツ語習得の必要性)
2. Die Schwierigkeit des Deutschlernens für die Japaner. (筆者訳：日本人にとってのドイツ語学習の難しさ)
3. Der Mangel an (guten) deutsch-japanischen Wörterbüchern. (筆者訳：[良い] 独和辞典の欠如)

洋州諸學ノ 皇國ニ行ハル、既ニ數十年就中獨逸彼ノ佛國
ノ戰爭ニ大捷ヲ得シヨリ日ニ盛ンニ且其學術殷浩ニシテ各
國ノ所能ヲ綜該ス故ニ我師大教授司馬先生夙ニ此學ニ達シ
一世ヲ風靡ス海内ノ生徒其學ニ嚮フ者既ニ其半ニ過ク然ル
ニ英佛蘭等ハ其早ク世ニ行ハル、ヲ以テ先哲所遺ノ詳書陸
續梓ニ上リ國內ニ布行ス獨リ獨逸學創開ノ晚キヲ以テ未ク
方寸ノ小冊子ヲモ見メ其學ヲ爲ス者皆其梯ヲ得サルニ苦
ム實ニ遺憾ト聞テ可シ我輩久シク之ヲ憂ヒ屢詳書ノ著ヲ先
生ニ請フト雖トモ先生官務紛擾ニシテ筆ヲ採ルニ暇アラズ
於是同門河村之昌澤田藤伯明文及ヒ予ヲシテ代テ此業ニ

図 5

從事セシム予輩不學非才固ヨリ此大業ニ任ヘメ屢之ヲ辭ス
ト雖トモ師命峻拒スルニ由ケテ遂ニ各々其固陋ヲ顧ミズ獨
國々ルリアム氏ノ詳典ニ就テ之ヲ翻譯シ又我師ノ訂正ヲ請
ヒ頃日初テ業ヲ卒フ名ケテ和譯獨逸詳典ト云是聊キ幼童讀
書ノ便ニ供スルニ出ルト雖トモ同好ノ士亦此ニ由テ以テ進
ムバ則チ其梯ヲ得ルニ庶幾ン乎

明治五壬申歲孟冬

加賀 明石朝幹識



の3点に要約できるとし、その最初の典型例として、春風社の『和譯獨逸辭典』の序文を挙げている（同書16から17頁）。

司馬凌海については、鈴木重貞氏が上記『ドイツ語の伝来』の中で「司馬凌海 —我国最初のドイツ語学者—」という1章を設けて論述しているのをはじめ、入澤達吉著『司馬凌海傳』（中外醫事新報 昭和五年）や同著『雲莊隨筆』（昭和八年）の中の「司馬凌海と松林飯山」、宮永 孝著『日独文化人物交流史』の中の「司馬凌海とドイツ語」（133～136頁）などがある。更にまた作家の司馬遼太郎が朝日新聞朝刊に連載した小説『胡蝶の夢』（昭和51年11月11日から昭和54年1月24日まで787回）で凌海の生涯を描いたことも私たちの記憶に真新しい。

大植四郎編『明治過去帳 物故人名辞典』（東京美術刊 昭和十年十二月原著私家版 昭和四十六年十一月新訂初版）による彼の生涯は次の通りである。

司馬盈之（筆者注みつゆき） 舊大學少博士従六位 近世文明の先驅者 東京府士族佐渡の農島倉榮助（眞野村大字四日町曾我家の出）の男にして母は山本氏、姓は治部宿彌、初稱凌海、字は安虧、損軒、無影樹下同船樓、船樓、眞弘、臺灣、五洋、梧齋の諸號あり天保十年十一月廿八日生れ七歳相川學館に學び十二歳江戸に於て唐津藩儒山田寛に漢籍を修め蘭學を松本蘭疇に、醫術を佐藤泰然に學び長崎に至り蘭人ボンヘーに就き不世出の才を以て學九ヶ國を該ね和漢蘭英佛露清希羅の諸語に通じ特に獨英蘭に精しく獨語の如きは五ヶ月の獨修を以てドクトル・ミルレルをして何年間獨逸へ留學せしかとの質問を發せしめし程なり尋で家を弟某に譲り姓を司馬と改め諱を以て通稱とす…中略…三年三月大學少博士に任じ正七位に、四年四月本官を以て兵部省病院出仕を兼ね七月文部少教授に任じ八月十五日中教授に遷り従六位に五年正月相良知安と文部省五等出仕と為り東校教場の事を管理し大教授に進み正六位に陞る三宅秀、桐原眞節

等君の下風に立てり九日文部省五等出仕を命ぜられ六年十二月宮内省五等出仕を兼ね七年十月両省出仕を免じ位記を奉還八年五月元老院少書記官を拝し再び従六位に、十二月官を免じ九年五月愛知縣醫學所副教師兼病院長と為り譯官を兼ね十年四月満期職を解かれ名古屋に開業す遠近來り治を乞ふ者履常に戸外に盈つ業餘講受して倦まざりき君私立病院及び私立醫學校を建設する志あり曾て下谷練堀町に春風社を開き教授し生徒千有餘人に達し獨和辭典を發行す實に同種辭書の創始にして頗る世に愛重せらる而して邦人獨逸書を講ず君を嚆矢と為す不幸肺を病み荏苒癒えず十二年伊豆熱海に湯治し疫益々加はり歸京の途次相州戸塚驛に歿す齡三十八歳…以下略

これによると、類稀な語学の才能に恵まれた司馬凌海の多彩な生涯と共に、その背後に明治新政府の採った新制度の目まぐるしい変転も浮き彫りにされてくる。ドクトル・ミルレルをして云々の件については、『胡蝶の夢 二』に、大学東校に招聘されてドイツからやってきた陸軍軍医 B. C. L. ミュルレルが、凌海（小説の中では伊之助）の達者なドイツ語に驚いたエピソードが、次のように書かれている。

ミュルレルはすでに五十歳を越えた温厚な人物で、その夫人はフランス人であった。伊之助と初対面のとき、

「あなたはドイツのどこにおられましたか」

と、きいた。伊之助は日本から一步も離れたことがない、という、ミュルレルは感嘆して、自分の妻はフランス人である、私と結婚して十一年になるが、あなたのように流暢には話せない、といった。

(『司馬遼太郎全集 第四十一巻』 昭和五十八年十二月 株式会社文藝春秋 381 頁)

しかし、入澤達吉氏は「司馬凌海と松林飯山」の中で、凌海の裏の一面を描いている。それによれば、凌海が江戸の蘭医松本良甫の塾にいた当時は「放縦不羈の悪童であって、容易に塾長の節制に従」わず、その余りに

も放埒な挙動のために遂に退塾させられたという(『雲莊隨筆』111~112頁)。長じてのちも、実に珍しき天才ではあったが、「然し彼れは甚豪放の性質であって、金銭を浪費し、邊幅を飾り、又稀なる漁色家であって、其為到る處で、厄介な問題を惹き起こした」(同書117頁)。

凌海は、明治3年頃下谷練堀町に開いた独英塾春風社を、彼が官を辞して愛知県病院へ赴任する明治8年まで維持した。同社では『日独対訳辞書解題(一)』の『独逸熟語集』で紹介した大熊春吉が助教授を勤めた。春風社が編集した独逸語教科書には下記のものがある。

獨逸單語篇 Das Buch des Unterrichts; Das Buch Unterrichts für

Kinder welche die deutsche Sprache zu lernen beginnen. 明治四

年刊 洋装仮綴 17,3cm×11,2cm 80頁 ラテン字体の活字印刷

初学者向きに編んだ名詞中心の単語集; 1490語が横1行に1語ずつ示され各語に定冠詞または不定冠詞が付いているが、訳語はない。

序文には次のように書かれている。

方今獨逸ノ學日ニ盛ニ月ニ多シ然ルニ教師甚ダ乏シク童蒙初學普
ク其門ニ入り難シ余竊ニ之ヲ憂エ此書ヲ譯シテ以テ世ニ公ニス初
學ノ童子此書ニ就テ其門ニ入ルヲ得バ他日大成ノ君子ト為ルモ知
ルベカラズ此レ余ノ陋劣ヲ厭ハズ此書ヲ譯スル所以ナリ

譯者識

訳者名は明らかでない。

獨逸文典字類 明治四年三月刊 木版和綴じ 17cm×12cm 88葉 約

三千語(田中梅吉氏によれば約2600語)の訳語付き単語集

各単語に品詞と訳語が付けられ、ドイツ語は草書体で、訳語は楷書体で、ペン書きされている。巻頭に春風社々中による下記の序文がある。

方今文明ノ化洋學ノ威ナル前古今比ナシ坊間新刻林ヲナシ初學ノ
徒左右ニ資テ其源ニ逢フ特リ獨逸ノ學ハ創立日浅メ未ダ搜字ニ便
スルノ書ナシ予輩其文典ヲ學ブノ際其言辭ニ暗キニ苦ミ一々之ヲ

師友ニ叩キ之ヲ辭典ニ徴シ從テ讀從テ記スル者既ニ積テ卷ヲナス
本ヨリ坐右備忘ニ供スルノ小冊ニメ敢テ大方ニ示スニ足ラズ然モ
童蒙搜字ニ苦ム者何ゾ限ム此卷ヲ把テ以テ文典ニ臨マバ稍小補ナ
キニ非ルベシ因テ之ヲ刪正増補シ文典字類ト名ケ以テ世ニ公ニス
予輩學淺ク才庸ナリ

獨逸學入門 Das deutsche A=B=C buch. Das deutsche Abecebuch oder
die ersten Lectionen für die Kinder, welche die deutsche Sprache
zu lernen beginnen. 明治四年四月刊 木版和綴じ 18cm×12cm
27 葉 神田鍛冶街式町目 中外堂

標題の通り入門書で、綴字と発音の部、単文集の部、数詞部の3部から構成されている。巻尾に下記のように記されている。

蘭學漸衰ヘテ英學隆ニ佛學盛極リテ獨逸學興ル本ヨリ學ノ難易ニ
由ルト雖モ亦世ノ隆替ニ關セズムハアラス人ノ獨逸ヲ學ムト欲ス
ル者書ノ舶載ニ乏キヲ憾ム今春風社ノ諸彦ニ請ヒ日尔曼ノ雜書ヲ
撰述シ簡易之選ミ鐫剥取勉ム以テ初童ノ時習ニ便スルノミ敢テ大
方ノ電瞥ヲ瀆スト謂ハムヤ (筆者注 日尔曼=ゼルマン)

編者名はやはり明らかでない。因みに『新刻書目便覧』によると、『獨逸單語篇』は二十五錢、『獨逸文典字類』は五十錢、『獨逸學入門』は十二錢五厘であるが、『和譯獨逸辭典』の値段は書いてない。

『和譯獨逸辭典』は本文 1046 頁、略語表 Von der Abkuerzung der Woerter 4 頁、誤辭撰 (正誤表) 6 頁、不規則動詞表 Verzeichniz der Unregelmassigen Zeitwoerter 8 頁で、奥付はない。字体はラテン字体を使い、見出し語は品詞に関わらず頭字を大文字とし、訳語は漢字と片仮名で縦書きである。発音表示はなく、名詞には m, f, n, で性を示しているが、単数、複数の記載はない。収録語彙は推定 2 万語、所々に簡単な熟語も収録している。例えば A の最初の 2 頁は次のようである。(図 6)

日独対訳辞書解題 (二)

A.	アベチエノ第一文字
Aak, <i>f.</i>	平タキ底ノ付タル舟ノ名
Aal, <i>m.</i>	鰻
Aalbeere, <i>f.</i>	黒キ菓樹ノ實
Aale, <i>f.</i>	履作りノ用ル大針
Aalen, <i>vn.</i>	鰻ヲ釣ル、鰻ヲ捕ヘル
Aalkrische, <i>f.</i>	樹ノ實
Aar, <i>m.</i>	鷺
Aas, <i>n.</i>	腐肉、死シタル獸、食物
Aasen, <i>va.</i>	皮ヲ剥グ、皮ヲ滑ス
Aasig, <i>a.</i>	死骸ノ、死骸ノ如キ
Aass, <i>n.</i>	食物
Aassung, <i>f.</i>	食物又食フコト
Ab, <i>ad. et. prep.</i>	離レテ、カラ、下ニ
Abaasen, <i>va.</i>	皮ヲ滑ス
Abachzen, <i>vr.</i>	瘦セ衰ル
Abackern, <i>va.</i>	タガヤス
Abacus, <i>m.</i>	算盤
Abalieniren, <i>va.</i>	他ニ移ス
Abändern, <i>va.</i>	變化サスル、曲ゲル (文字ヲ)
Abänderung, <i>f.</i>	變化スルコト、衰微、傾、屈曲
Abängsten, Abäng-	困ラス、責ムル、悲シマシム
stigen, <i>va.</i>	勞ラセル、退屈サセル
Abängstigung, <i>f.</i>	安穩ナラスコト、快カラヌコト
Abarbeiten, <i>va.</i>	摩リ耗ラス、衝キ崩ス

日独対訳辞書解題 (二)

Abärgern, <i>va.</i>	心痛ニテ勞ラセル
Abart, -ng, <i>f.</i>	種々、變化、劣ルコト、衰ルコト
Abarten, <i>vn.</i>	衰へル、變性スル
Abartig, <i>a.</i>	種々ノ、變化ノ、衰へタル
Abaschern, <i>vr.</i>	疲ラス、磨ガク (灰ニテ)
Abässen, <i>va.</i>	吠ユル、牧飼スル
Abästen <i>va.</i>	枝ヲ切離ス、木ヲカル
Abätzen <i>va.</i>	食と盡ス、費ス
Abäugeln, <i>va.</i>	色眼ヲ遣フ
Abäusserung, <i>f.</i>	放サセルコト (持前物ヨリ)
Abbacken, <i>va.</i>	焼キ盡ス
Abbaden, <i>va.</i>	浴淨サスル、浴ニ入ラスル
Abbalgen, <i>va.</i>	皮ヲ剥ク、皮ヲキセル
Abbeeren, <i>va.</i>	實ノ皮ヲ取ル
Abbefehlen, <i>va.</i>	前令ヲヤメル、前令ニ反シテ命スル
Abbeissen, <i>va.</i>	嚙ミ取ル、咥シメル
Sich vor lachen	笑と過ス
Die zunge abbeissen,	
Abbeitzen <i>va.</i>	瘦サスル、軟ニスル
Abbekommen, <i>va.</i>	允前取ル、共ニスル、係リ合フ

Abart, -ung のように、同じ意味の語 (Abartung) を併記する場合、同綴の部分を一で示している。他にも例えば Macht, -ächte, *f.* 力, 權威, 勢イ がある。この場合は Macht の複数形 Mächte を単に示しているのではなく、Mächte も独立の語と見なしているのであろう。

Abbeissen で Sich vor lachen Die zunge abbeissen 笑ヒ過ス のよ

Handwörterbuch

dit

DEUTSCHEN SPRACHE FÜR
JAPANER.

ABA

A.	トイロへ紙へ	紙
Aak, f.	汁	汁
Aal, m.	鮫	鮫
Aalbeere, f.	鮫	鮫
Aale, f.	鮫	鮫
Aalen, va.	鮫	鮫
Aalkrische, f.	鮫	鮫
Aar, m.	鮫	鮫
'Aas, n.	鮫	鮫
Aasen, va.	鮫	鮫
Aasig, a.	鮫	鮫
Aass, n.	鮫	鮫
Aassung, f.	鮫	鮫
Ab, ad. et. prep.	鮫	鮫
Abaaen, va.	鮫	鮫
Abachzen, vr.	鮫	鮫

図 6

誤辭撰

* 此印誤字也

5.

S. s. 1.	A.	...	185.	Bestürmen.
...10.	Aalkirsche.	...	195.	Bewillkom-
...11.	Abgleiten.	...		ung.
...	Abgrämen.	...	198.	Biekelhaube.
...15.	Abgrämeln.	...	203.	Blattergebac-
...24.	Abkürzer.	...		kne.
...57.	Abschilden.	...	204.	Blebschlag-
...62.	Anheim.	...		er.
...69.	Anmuthig.	...	207.	Blutbad.
...70.	Anspielen.	...	217.	Bringer.
...	Anspruchlos.	...	218.	Bruchhafter.
...	Anspruch-	...		
...80.	slos.	...		C.
...	Arbeitsbeut-	...	241.	Curcumei.
...83.	el.	...		
...	Aschermittw-	...		D
...84.	ocbe.	...	245.	Dankbarkeit.
...	Associiren,	...	248.	Daune, (flau-
...	(sich verbi-	...		infeder).
...96.	nden.)	...	252.	Demuthigung.
...129.	Aufnöthigen.	...	257.	Dictiren, va.
...	Aussaugen.	...	264.	Bressiren,
...		...		(zurichten).
...		...	265.	Dronedar,
...153.	B.	...		(trampelt-
...164.	Bebomben.	...		hier).
...	Beteinander.	...		

図 7

略語表

Abschn.	斷 <small>トキ</small>
Anni.	年 <small>トシ</small>
Antw.	答 <small>コタヘ</small>
Ausc.	出 <small>デ</small>
A. T.	早 <small>ハヤ</small>
a. a. O.	早 <small>ハヤ</small> 譯 <small>ト</small>
a. St.	早 <small>ハヤ</small> 譯 <small>ト</small>
Cap.	母 <small>ハハ</small>
Cent	百 <small>ヒャク</small>
Centn., Ct. od. Cir.	百 <small>ヒャク</small> (九十六日)
d. i.	日 <small>ヒ</small>
d. h.	日 <small>ヒ</small>
d. j.	日 <small>ヒ</small>
d. m.	日 <small>ヒ</small>
Dem. od. Demois.	女 <small>メ</small>
Doct. od. Dr.	博士 <small>ハクシ</small>
d. G. G. B.	博士 <small>ハクシ</small>
d. R. C.	博士 <small>ハクシ</small>
Dergl.	博士 <small>ハクシ</small>
d. V.	博士 <small>ハクシ</small>
Durchl. od. Drehl.	博士 <small>ハクシ</small>
Ew.	博士 <small>ハクシ</small>
Ewr.	博士 <small>ハクシ</small>
Fl. oder fl.	博士 <small>ハクシ</small>
Fr.	博士 <small>ハクシ</small>

4.

f.	女 <small>メ</small>
int.	譯 <small>ト</small>
n.	名 <small>ナ</small>
nun.	中 <small>ナカ</small>
pl.	譯 <small>ト</small>
prep.	譯 <small>ト</small>
pron.	譯 <small>ト</small>
va.	譯 <small>ト</small>
vimp.	譯 <small>ト</small>
vr.	譯 <small>ト</small>

うな熟語・慣用句の類は、例えば **Machen va.** 為ス、用意スル、飾ル、生スル の見出し語で

Einen aufsatz machen | 文軸ヲ撰ム

Einem zum meister machen 置ムスル

Einen glücklich, unglücklich machen 幸不幸ヲ授ム

また, **Treiben va.** 追ヤル、無理押スル、働カス、為ス、商売スル の見出し語で

Ein gewerbe treiben 商売スル、交易スル

Ein geschäft treiben 務ムル

Scherz mit etwas treiben 雑談スル

Wie man's treibt, so geht es 追ヒヤル、フタタツテ居ル、動ク、
居テ、轉ムル

Aufs ausserste treiben 大々敷ナシ

Zu paaren treiben 比較シテ見ル、照テヲ立ル

Das treiben 追ヒヤルコト、為スコト

などがある。用例中の名詞の小文字書きが目立つ他、分綴の誤りが到る処に見受けられるのは、当時はまだ分綴法が印刷関係者の間で認識されていなかったのかもしれない。単純な誤植も少なくないが、それらは「誤辭撰」の部(図7)に拾われている。

略語表(図8)に記載されているのは97語で, **Abschn.** 編, 分チ から **z.B.** oder **z.E.** 譬へハ まではアルファベット順, その後に以下の品詞名が並ぶ(図9)。

a. 形容詞

ad. 副詞

art. 冠詞

conj. 接詞

f. 女性名詞

日独対訳辞書解題 (二)

<i>int.</i>	感動詞
<i>m.</i>	男性名詞
<i>n.</i>	中性名詞
<i>num.</i>	数詞
<i>pl.</i>	複稱
<i>prep.</i>	前置詞
<i>pron.</i>	代名詞
<i>va.</i>	能動詞
<i>vimp.</i>	無人動詞
<i>vn.</i>	中性動詞
<i>vr.</i>	復帰動詞

『享和袖珍字書』の巻頭の「略語之表」に記載の品詞名と比べても相当の相違が見受けられる。元の形は示されていない。

「不規則動詞表」に挙げられている動詞は 218 語。『享和袖珍字書』に比べてやや多いのは、古形や非分離の複合動詞 (erfrieren, erbleichen, ersaufen, erschallen, erschrecken, ertrinken, erwägen, verbergen, verbieten, verbleiben 等) も記載しているからである。形式は以下の通り (図 10)。

Infinitiv.	Prasens des Indicativs.	Imperfekt.		Imperativ.	Particip
		Des Indicativs.	des Konjunctivs.		
Backen	ich backe, du bakst, er bäckt etc.	ich buk	ich büke	backe	gebacken.
Bedingen	ich bedinge etc.	ich bedung	ich bedünge	bedinge	bedungen.
Befehlen	ich befehle, du befehlst, — er befiehlt etc.	ich befahl	ich befohle	befiehl	befohlen.
Befleissen	ich befeisse etc.	ich befliss	ich beflisse	befleisse	beflissen.
Beginnen	ich beginne etc.	ich begann	ich beganne	beginne	begonnen.
Beissen	ich beisse, du beiszest, er beiszt etc.	ich bisz	ich bisse	beisz od. beisse	gebissen.

Verzeichniss der Unregelmässigen

Zeitwoörter.

Unregelm. Zeitwoörter.		(1)			Bac—Dre	
Infinitiv.	Präsens des Indicatives.	Imperfekt des Indicatives.		Konjunctivs	Imperativ.	Particip.
		ich buk	ich bedung	ich buke		
Backen	ich backe, du bäkst, er backt etc.	ich buk	ich bedung	ich buke	backe	gebacken.
Bedingen	ich bedinge etc.	ich bedung	ich bedung	ich bedünge	bedinge	bedungen.
Befehlen	ich befähle, du befählest, er befiehlt etc.	ich befahl	ich befahl	ich befohle	befehle	befohlen.
Befleissen	ich befleisse etc.	ich befloss	ich befloss	ich beflüsse	befleisse	befleissen.
Beginnen	ich beginne etc.	ich begann	ich begann	ich begünne	beginne	begonnen.
Beissen	ich beisse, du beisest, er beisst etc.	ich biss	ich biss	ich bisse	beiss od. beisse	gebissen.
Bellen	ich belle, du bellst(billst), er bellt (billt) etc.	ich bellte oder bell	ich bellte oder bell	ich bellete (bille)	bell od. bill	gebellt od. gebollen.
Bergen	ich berge, du birgst, er birgt etc.	ich barg	ich barg	ich barge	birg	geborgen.
Bersten	ich berste etc.	ich borst oder barst	ich borst oder barst	ich bürste	berste	geborsten.
Besinnen	ich besinne etc.	ich besann	ich besann	ich besünne	besinne	besonnen.
Beizzen	ich beizze etc.	ich beiz	ich beiz	ich beizze	beizze	beizzen.
Betrügen	ich betrüge etc.	ich betrog	ich betrog	ich betrüge	betrüge	betrügen.
Bewegen	ich bewege etc.	ich bewog (bewog)	ich bewog (bewog)	ich bewege (bewege)	bewege	bewegt (bewogen).
Biegen	ich biege etc.	ich bog	ich bog	ich büge	biege	gebogen.
Bieten	ich biete etc.	ich bot	ich bot	ich biete	biete	geboten.
Binden	ich binde etc.	ich band	ich band	ich bände	binde	gebunden.
Bitten	ich bitte etc.	ich bat	ich bat	ich bitte	bitte	gebeten.

図 10